

Title	通信
Author(s)	
Citation	天界 = The heavens (1929), 9(96): 218-219
Issue Date	1929-02-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/161381
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

通 信

入會願ひに添えて

私の生れたのは近江の片田舎、高島郡の更に山の手朽木といふ淋しい村にある在所でした。山又山にかこまれた小盆地状の中を、安曇川といふ滋賀縣では大河に屬する一つの川が流れ、兩岸には山地の特色たる小さな田があるのです。その田の間にボツリボツリ四五軒七八軒と介する在所の一軒で生れたのです。私達にはあまり遊び友達も多くありませんでした。——家が少いので。

小學校に通ふ頃まで私は祖母のところにゐて、よく御話をききました。祖母はよく宗教——殊に佛教に關した因果物語や、傳説を教へてくれたのです。

當時私は七夕の御話をきいて、そのお話にどれだけアトラクトされたでせう。「天の川」の名に親しみをもちはじめたのもその頃からです。「ひこぼし」や「なりひめ」の位置を教へられて喜んだのもその頃です。私はその頃から星がすきになりました。祖母にもつと空の御話をねだつても、祖母の天に關する知識は「七夕」と「三つ星」だけでした。

小學校へ通ふ様になつて二三の友達も出来ました。私は今でも稻の取入ごき。四方の山々が紅葉して赤くなり、赤い柿の實をついた鳥共のねぐらにかへる頃、友達と一しよに、刈られた田に遊びつかれて歸るさ、『一番星見つけた!』と御星様の數をかぞへながら家路についたのを覚えてゐます。

田舎の小學生には都會の子供の様に面白い活動寫眞をみることも芝居をみることも出来ません。唯一の楽しみは雑誌を読むことです。私もれだつて雑誌だけは買つてもらつてゐました。今では震災以來廢刊になつてゐるらしいですが東京の赤阪小學新聞社といふのがあつて、週に一回づゝ「小學新聞」といふのを發行してゐました。私はこの新聞がひどく氣に入つて、殆んど二年ばかりきつてゐました。確か大正十一年の五六月だつたと思ひます——確かなところは忘れましたが——その新聞の科學のページといふのに「火星が近づく」として種々のことが書いてありました。「千何百萬里かのところまでくる」「運河や海があつて人がすんでゐるらしい」等々。こんな記事を読んで私は又新しい興味を覺えました。お星様といへばノンノ様として何か神佛の様な崇高な宗教的なものとして教へられてゐた私はさし渡しが千七百里もある大きなたまで、春夏秋冬があるときいたとき實に私は何さといはれぬ好奇心に動かされました。千何百萬里の遠さ、これを汽車で行つたらどれだけかゝるだらう? こんなことを計算して、屋根の上へ上つて星をおさせといつた笑話を、ほんとに笑つた私も、まさか二百年もかゝらうとは思ひませんでした。

それから私のお星様に對する觀念が大分變つたわけです。それでもまだ恒星さ

遊星さかいふものゝ區別はついてゐないのです。

中學に入つたのはその翌年の大正十二年です。湖北今津のうすらさむい午後私は圖書室で原田氏の星の科學さかいふのを出してみました。開卷第一「地上の星を花さひ、御空の花を星さかいふ」

私は吸ひこまれる様に夢中で五六頁讀んでしまひました。私がホントに星に愛着を感じる様になつたのはそれからです。理論上のことは中學に入つたばかりでわかりませんでした。それでも星の光、色、殊に星座にはどれだけ心をひかれたか知れません。星の見取圖や表やなど、開さへあれば書いてゐました。傳説も面白かつたです。中島孤島氏や杉谷代水氏の神話や傳説集も讀みました。

恰度當時は秋から冬に入る頃で、勉強にも飽きた十一時頃、祖母からきいた三つ星をオリオン座としてまゝめて見たとき、どんなに嬉しかつたでせう。

大犬だの小犬だの双子だの牡牛だのと、私の好きな奴がたくさん集まつてゐる。私は星圖と懐中電燈を以て茫然として外に立ちつくしました。寒さも忘れて。私は母方の里に下宿してゐたのです。皆はもう寢床に入つてゐましたが私がいつまでも外に立つてゐるので心配して起きて來ました。私はこの時ほど得意だつた事はありません。それから空の晴れた日は毎晩新しい星や親らしい星座をおぼえて行きました。北斗七星を見出したのは冬の終り頃でした。

私が今までに讀んだ本の中で非常に氣に入つたのは先生の「星座の親しみ」と吉田源治郎氏の「肉眼で見える星の研究」です。私は書店の前でよく星の本をさがしました。旅行に行つたときでも星の本を買つたため小使がみんななくなつたこともあります。

學校の課程がすゝむにつれ、少しづつ理論的なこともわかつて行くのは愉快でした。高等數學の必要なところなど思ひもありませんが……。

中學卒業間際です。私達の學校は大展覽會を開きました。そのとき私は光學器械の説明と看守をうけもつたのです。そのときの器械の中に天體望遠鏡がありました。私はそれでどうしても星——殊に私の興味のあつた星雲や星團、それに二重星が見たくてたまらないのです。

私はたうたう先生のところへそのことを申し出ました。そしてその晩うちへもかへらずに饑腹で腹をつくつて、宿直の先生にたのんで望遠鏡を外へ持ち出しました。不幸にしてその晩は曇つてゐたため二三時間に於てすべての星は姿をかくし、私はほんさに見たかつたアンドロメダやオリオンの星雲にはお目にかけられませんでした。その晩は小使にウンと火鉢へ火を入れてもらつて學校で夜をあかしました。其後三四回も學校で徹夜したことがあります。例のプレアデスの一團に、天の川に、私は四方八方に望遠鏡を向けました。木星の四つの月を一行に見て快哉を叫んだこともあります。私が小天文家振つて觀測してゐるとき、寄宿舎などから友達がきて、私の合せた望遠鏡をのぞきながら私の説明に感心するのを感じたことも愉快でした。(214頁へ續く)